

福島敏夫随筆集

「乙戸南雑話「花鳥風月及び星・虹を愛でながら」

主宰論説41

美の巨人、知の巨人、生の巨人（再修正原稿）

「美の巨人」という考え方がある。

とかく住みにくく、迷い悩み、大波小波に揺られながら、おぞましく生きることを強いられることも少なくないこの人の世において、芸術の効用を指摘したのは、日本の明治時代の文豪である夏目漱石である。その著作「草枕」で、「知に働けば角が立つ、情に竿をさせば流される。意地を通せば窮屈だ。」うんぬんのかたちで、その旨述べているようである。その際、効用を持つ芸術も、絵画、彫刻、陶芸、建築など、アポロ的な造形美に属するものもあるが、音楽に代表されるディオニソス的な陶酔美のものもある。能・狂言や踊りなどの中間型美に属するものもある。それらの美的な創作に秀でた人は、美の巨人と呼ばれることも多い。絵画に特定してみると、西欧の印象派画家のモネ、ゴッホ、抽象画の巨匠ピカソ、中国の南宋画の馬遠、夏珪、日本の水墨画画家の雪舟、襖絵画家狩野永徳、富岳三十六景等の葛飾北斎、日本の風景画家の横山大観、日本の近代美人画家の上村松園と鏑木清方など、この類の人は、枚挙に暇がない（取り上げ方に、多少の好みと偏見も混じるかもしれない）。

また、住みにくいこの世にあっても、いろいろな学習の中で身につけた知識や、人生の経験の中で身につけた知恵を基にして、人生を巧みに生き抜いて、また、世の人の啓蒙に貢献してゆく人は、「知の巨人」と言われるようである。哲学者、啓蒙思想家、作家、文筆家などが、挙げられるのかもしれない。国際的な賞を取る研究者や学者も、この中に入れられる人も多いと考えられる。

生の巨人となると、どのような人を指し、どのような人が挙げられるのか、なかなか難しいようである。ただ、功成り名を遂げ、世俗の出世とお金を手にした人とばかりは言えないようである。

生前、生後を問わず、世界人類に多大な貢献をした偉人、ある分野で、研鑽と修練の末に前人未踏の最高レベルに達した名人、変人・奇人と言われる一風変わった非凡な才能を発揮する人たち、生来の浮世離れした霞を食って生きる仙人、艱難辛苦を乗り越えて精進した暁に、何か後光のようなものを感じさせる聖人などが、考えられる。このような人は、そのときはやりや好みに左右されることもあるようだ。「生の巨人」は、国境、宗教、時代を超えて人類史上に燦然と輝く生き方の金字塔を打ち立てた人という、当たらずとも言えども遠からずとうことかもしれない。

自由短歌：

時と空間乗り超えて燦然と輝く金字塔

燦然と時と空間乗り越えて光輝く金字塔

令和6年5月4日

令和6年6月5日脱稿